

戯曲

晴れ時々、鬼

(登場人物)

イヌヲ・老人

少女・こども

ミコト

大臣

山の民

爺

婆

0. 序章

夕暮れ時か、明け方か、薄暗い空間に頭から布を被った老人が一人。

老人　ひとーっつ、ふたーっつ、みいーっつ。
もういいかーっつ

遠く呼びかけるように、繰り返す。

片足を不自由に引きずりながら、四方に向かって

老人　（繰り返し）もういいかーっつ

少女が現れる。背後から老人に近づき、服の裾を引く。

老人、振り返り、少女の顔を見つめる。
じつと見つめる。

少女　何、してるの？

老人　かくれんぼ。

こども　かくれんぼ？（辺りを見回し）誰か隠れているの？

老人　鬼、じゃよ。

こども　鬼？

老人　そう、鬼が隠れる、かくれんぼ。

こども　えー、そんなのおかしいよ。

老人　おかしいじゃろ？わしもそう思う。そう思いながらずーっと待っておる。

こども　ずーっと？

老人　そう、ずーっと・・・昔、から

こども　ずーっと、昔？

老人　そう、ずーっと、ずーっと、昔。

時は遙か過去へとさかのぼる。

1. ミコトの部屋

ミコト　　ウーーーーー！？

大臣　　はい、ウラです。

ミコト　　何だ？その、ウラって？

大臣　　はい、こちらをご覧ください。（地図を広げ）これが、私たちの住む島です。

この島の中心にあるのが、我がヤマトの国。

そして、その遙か西の果てに、キビとよばれる場所があります。

ミコト　　キビ？知らない。

大臣　　そのキビにウラという名の鬼が住んでいると。

ミコト　　おにーーーー！？　　またまたーーーー

大臣　　いえ、それが確かにいるようなのです。

（怪奇話風に）鬼のすみかと思われる山の上から、怪しい光や、恐ろしいなり声が聞こえ、民たちは大変怖い思いをしていると・・・そう聞いております。

3

ミコト、恐怖のあまり部屋の隅に身を隠す

大臣　　ここは是非、ミコト様じきじきに鬼の征伐へ行つてはいかがでしょうか？
キビの民も大変喜びます。

ミコト　　あ、ああ、いやああ、そうだなあ。行きたいのはやまやまだが、ちと、遠いなあ。

最近、足腰が悪くてなあ、わしも年かのう。あ、そうだ、この役目がピッタリのやつがいるぞ。

おい、イヌヲーーーー、イヌヲはおらんかーーーー

イヌヲが駆け込んでくる

イヌヲ　　はいはいはーい。（勢いあまってミコトの前を歩き過ぎて）お呼びでしょうか・・・あれ？

ミコト　　（イヌヲの頭をたたき）お前は、どうしてそうなのだ？

イヌヲ　　え、何がですか？

ミコト　　お前は、サル丸やキジ太に比べて、力もなければ、頭も悪い。
お前が得意なのは逃げ足の早さだけではないか。

イヌヲ いやー、照れるなあ

ミコト 馬鹿！褒めておらん。

だが・・・そんなお前にピッタリの仕事が見つかったぞ。

イヌヲ え！何ですか！？

ミコト （大臣に）おい

大臣 はい。（までも地図を広げ）これが、私たちの住む島です。

この島の中心にあるのが、我がヤマトの国。

そして、その遙か西の果てに、キビとよばれる場所があります。

イヌヲ キビ？

大臣 そのキビにウラという名の鬼が住んでいると。

イヌヲ おにー！ー！？ またまたー！ー

大臣 （同じく怪奇話風に）鬼の住処と思われる山の上から、怪しい光や、恐ろしいなり声が聞こえ・・・

イヌヲ 怖い、怖いー！ー！ー（逃げ出す）

大臣 （あきれて）・・・ミコト様

ミコト ・・・・まったく、また逃げ出したか。

（隠れたイヌヲに聞こえるように）おい、イヌヲよ！

今の話が本当かどうか、お前の自慢のその足で、キビの地へ偵察に行ってくるのだ！
よし・・・行ってくれるなら、お前に、この団子をやろう。

イヌヲ （駆け込んでくる）え、お団子——！！

ミコト この団子、一口食べれば、一日分、キビの国へと近づける。

二口食べれば、二日分、キビの国へと近づける。さあ、何個ほしい？

イヌヲ えーと・・・ひとつ・・・ふたつ・・・いっぱい！

ミコト よし、ひとーつ（ころがす）、ふたーつ（ころがす）、いっぱい（3つ目ころがす）
さあ、行ってまいれ！ いぎ、キビの国へ！

2. キビへの路

イヌヲ、キビの国をめざして走る。
やがて途中で、力がなくなり足を止める。

イヌヲ （キビ団子を食べ） よし！

再び駆け出す。
が、また力がなくなり。

イヌヲ （キビ団子を食べ） よし！

再び駆け出す。
もはや体力の限界。

イヌヲ ああ、もう最後の一個か・・・いっぱいって、少ないなあ・・・
食べちまうか、我慢するか・・・

突然、あたりが暗くなる。
暗闇の中、遠くに赤い光と轟音。

イヌヲ わああ、な、なんだ！
ああ、これが、鬼のうなり声ってやつか！！！！
た、助けてーーーーー！！

恐怖でうずくまるイヌヲに、背後から仮面の少女が近づく。
少女、イヌヲの服を引く。

イヌヲ （振り返り） うわああああ、でたーーーーー
（団子を出し） これあげるから、許してーーーーー

団子を差し出したまま、気絶するイヌヲ。
少女、団子を手取る。

暗転。

3. 爺婆の家

爺 昔々あるところに、おじいさんと

婆 おばあさんが、いました。

爺 おじいさんは、山へ柴かりに

婆 おばあさんは、川へ洗濯に行きました。

おばあさんが、川で洗濯をしていると、川上のほうから、どんぶらこ、どんぶらこ、と、
（イヌヲが流れてくる）変な男が流れてきました。おばあさんは、その男を、うちへもって帰り

倒れているイヌヲをひきずり家へもって帰り、爺と婆で囲む

爺 お爺さんが、包丁で割ってみると・・・（思い切り割る動作）

イヌヲ （目を覚まし）待って！割っちゃだめーーーー

爺 何じや、生きとるのか

イヌヲ あ、あれ、ここ、どこ？？

婆 ここは山のフモトじや。

あんたは山の上のほうから、どんぶらこ、どんぶらこと流れてきたんじや

イヌヲ （山を見上げて）あ、そうだ、おいら、あの山の上で、おつかねえ思いして、
・・・もう死ぬかと思った。

爺 ほうじやろう。あの山の上には近づかんほうがええ。

イヌヲ やっぱり鬼がいるのか？

爺 鬼？

イヌヲ おいら聞いたぞ。おつかねえ音。あとは怪しい光も。うわき通りだ。

婆 あんたは、いったい？

イヌヲ え、いや、おいら、その、ミコト様の・・・

爺 ミコト？ 今ミコトと言ったか？

イヌヲ そうそう、だからおいらミコト様の

婆 ミコト様！？ あんた、ミコト様けえええ

爺 いや、これは大変な失礼を。へへえ。

イヌヲ いや、おいらは

婆 どおりで、ただの若者にしちや、上品なお顔立ちをしとる思うた。

イヌヲ いやー、照れるなあ

爺 ミコト様みたいなお偉いお方が、なんで、こんな辺鄙なところへ？

イヌヲ えっと、鬼退治をするんで、まずは、そのための偵察・・・

爺 鬼退治！さっすが、ミコト様じゃ。

さあ、ばあさん、何ぼさつとしとるんじや。ごちそうを用意せんか。

イヌヲ え、ごちそう??

婆 ほれ、今朝とれたばかりの鯉じや。

イヌヲ わ、やった、いいの？ いただきま・・・

婆 これ食べて鬼に勝ったら、婆が作った料理で勝ちましたー、言うてくださるんか？

イヌヲ そうだなあ・・・じゃあ、いただきま・・・

爺 いやいや、爺が捕った鯉で勝ちましたー、じやろ？

婆 何言うとな。そんなん、そのどぶ川で腹出して死にかけとるの捕って来ただけじやろ。

爺 おめーこそ、それをよう洗いもせんと、適当に並べとるだけじやろ。

爺 何を！

婆 何じゃ！

イヌヲ まあまあ・・・じゃあ、爺様がとつて、婆様が料理して、イヌヲが食べた鯉で勝てましたーって、言うてくださるよう、ミコト様に言うておきます。

爺 へ。

婆 あんた、ミコト様でねえんか？

イヌヲ だから、おいらミコト様の命令で偵察に来た・・・

爺 何じゃ、まぎらわしい。

婆 どおりで、随分貧相な顔立ちじゃ思った。
(鯉をとりあげる)

イヌヲ え・・・鯉は

婆 あんたに食わせる鯉はねえよ。

爺 さあ、さつさと帰ってミコト様つれてこられ。

イヌヲ、乱暴に追い出される。

4. 山の砦

イヌヲ、空腹で倒れている。

イヌヲ

ダメだ・・・腹が減って・・・腹が減って・・・動けねえ・・・
もうここがどこだかもわからねえ・・・
ん？ いい匂いがする。

（立ち上がり匂いのするほうへ）どっちだ？こっちか？

イヌヲ、匂いを頼りにどんどん進む。

火にかかった鍋を見つける。

イヌヲ

あ、これか。んー、いい匂いがする。
ああ、中が見たい・・・でも、勝手に開けちゃ、まずいよなあ・・・。
うーん・・・ん、この音は・・・（鍋に耳を近づける）
大変だあーもう煮詰まってるじゃねえかー

イヌヲ慌てて鍋の蓋を開ける。

仮面をつけた少女と山の民たちが現れ、恐る恐るイヌヲを取り囲む。

イヌヲ

あ、いや、ちがう。盗み食いじゃねえよ。
これは、たまたま、いい音がしてたから・・・

山の民は警戒しながらイヌヲの様子をうかがう。

イヌヲ

（少女の仮面に気が付き）あれ・・・どこかで・・・
あああ、あの時の！ ひえええ。

イヌヲ、その場にうずくまる。少女、仮面をとる。

イヌヲを指さし、山の民に示す。山の民たちも警戒を解き、仮面をとる。

山の民1

おお、お主か。お嬢に団子をくれたのは。

山の民たち、珍しそうにイヌヲの顔をみつめる。

イヌヲ

え、な、なんだよ、照れるなあ

山の民1

いやいや。お嬢は、あの時もらった団子がとてもおいしかったようだな、
お礼がしたいと言っていたんだ。

今夜はちょうど、この村の祭りの日。ぜひ泊っていつてくれ。

イヌヲ

え・・・いいの？

山の民 1 もちろん。ごちそうもいっぱいあるぞ。

イヌヲ ……あの…その前に…さあ

山の民 1 ん？ 何だ？

イヌヲ （鍋を指し）これ、食べていい。

山の民 1 ははは、もちろんだ。たとえ食ってくれ。

イヌヲ やった、いただきまーす。

すごい勢いで食べるイヌヲ。その様子をあきれて見つめる山の民たち。

イヌヲ はい。ごちそうさまでしたー

少女、食べ終わったイヌヲの手を引き、立ち上がらせる。

イヌヲ え、ちよ、どこいくの？ おい

少女、イヌヲの手を引き、去る。

5. 海に見える丘

少女に手を引かれるイヌヲ。

イヌヲ (立ち止まり) もう、どこまで行くんだよ・・・あ！

前方に海が広がる。

イヌヲ わあ、う、海だあああ、すごえええ。

少女もじつと海の方を見つめる

イヌヲ ずっーと遠くまで続いている。海見るのが好きなのか？

少女、じつと前を見つめたまま

イヌヲ いっぱい島があるなあ。

あ、見て、あそこの島、玉のようにまんまる。

あつちは、ひとつ、ふたつ、いっぱい、島が連なってる。

少女 (遠吠えのような、または霧笛のような声で)

Woooooooooooooooooooo

イヌヲ え(驚いて) あ、あの島にか？

おおおおおおおおおおい

少女 (イヌヲを叩いて、首を横に振る)

Woooooooooooooooooooo

イヌヲ え？もつと遠くに？

おおおおおおおおおおい

少女 Woooooooooooooooooooo

二人とも、何度も声を出す

イヌヲ この海の方こう。何があるんだろう。おいら達の声届いたかな？

少女 (じつとイヌヲを見つめる)

イヌヲ 届いたよな、きつと！！

少女 （じっとイヌヲを見つめる）

イヌヲ なんだよ、何かおいらの顔についてるか？？

少女、照れてイヌヲの顔を叩こうとする

イヌヲ （よけて）おっと、やめろよ。

少女、さらにイヌヲを叩こうとするが、イヌヲさらりとかわして

イヌヲ ヘヘヘ、そう簡単に当たらねえよ。悔しかったら捕まえてみろー！。

少女、イヌヲを追いかける。逃げるイヌヲ。

イヌヲ どうだい。おいら逃げ足だけが一番だからな。

少女 「逃げる」手話をまねて）？？

イヌヲ そう、逃げる。おいら、逃げるの、得意！

少女 （少女、自分を指さす）

イヌヲ ん？ 何？ お前も逃げるの得意なの？？

少女、首を横に振り、少し考えて、自分のしている首飾りはずし、差し出す。

イヌヲ え、何？くれるの、これ。

（自分の首につけポーズをとって）どう？似合う？？

山の民たち登場

山の民1 おお、おったおった。

さあ、もう宴の用意ができたぞ。お嬢も行きましょう。

宴の音楽がはじまる。

皆で舞い踊る。

イヌヲ （酔って）いやあああ、楽しいし、おいしいし、何だか夢のよう！

山の民1 そいつはよかった。それにしてもお主は、どうしてこの山へ。

イヌヲ えー、それはー、ミコト様の命令でー

山の民 1 ミコト・・・

イヌヲ キビに行くための団子をもらってー、ひとつ食べれば、一日分、キビの国へと近づける。
ふたつ食べれば二日分、キビの国へと近づける。

おいら、いっぱいーもらったから、こんな遠くにもちゃんと来れたし、
あの子に団子をあげたから、皆と仲良くなれたんだ。

山の民 1 ・・・なんで・・・こんな遠い場所まで・・・

イヌヲ ええ？ それはー、この山にー、鬼が出るーって聞いてー

山の民 1 鬼？ はは・・・まさか

イヌヲ だって、みんな言ってるぞ。
恐ろしい声や・・・真っ赤に光る目や・・・。

山の民 1 ・・・そんなのただのうわさだ。

イヌヲ そうなの？？

山の民 1 見てみる。わしらここでこんなに平和に暮らしている。
鬼退治なんか始まったら、わしらはここで暮らせなくなる。
だから・・・な、そつとしておいてくれ。

イヌヲ そうか・・・うん・・・そうだな・・・こんなに楽しいんだもんなああ

山の民 1 いいな、約束だぞ。

イヌヲ わかった。

山の民 1 さあ、歌え、踊れ！

宴は続く。

6. ミコトの部屋

ミコト　ほう、鬼はいない、と申すか？

イヌヲ　はい。

鬼なんていないし・・・みんな幸せに暮らしてました。

ミコト　しかし、恐ろしいうなり声や真っ赤な光を見たのではないのか？？

イヌヲ　それは・・・そうなのですが・・・
・・・きつと、それは、まぼろしです。

ミコト　まぼろし？

イヌヲ　うん、おいら腹へってフラフラしてたから、それで

ミコト　は、は、は。まぼろしか！なるほど、面白いことを言うのお！

イヌヲ　ですが！

ミコト　では、お前が出会った村人や少女が、まぼろしでなかったと、どうして言える？

イヌヲ　え？

ミコト　そっちのほうが、まぼろしだったのかもしれないではないか！

イヌヲ　いや・・・それは・・・（自分の着けている首飾りに気が付き）
あ！そうだ、これだ！

ミコト　何だ？

イヌヲ　これ、あの子からもらったんだ！
これが証拠だ！

まぼろしなんかじゃなかった！！！！

ミコト　ほう・・・（イヌヲの差し出す首飾りをじっと見つめ）
なるほど・・・

イヌヲ　ね！

ミコト　（大きく手を叩く）

よいか皆のもの！これより鬼の征伐へ参る！

イヌヲ え！な、なんで！

ミコト イヌヲよ、お前がその先頭に立て！

イヌヲ だって、鬼はいないのに！

ミコト いや、いる！鬼は必ずいる！

イヌヲ そんな・・・

だけど、おいら約束したんだ、鬼退治はしないって！

ミコト ほう・・・わしの命令に逆らうのか？

誰か！誰か！

こやつを牢にぶち込んでおけ！

イヌヲ そんな、ちよ、まってよー

うわあああああああ

イヌヲ逃げ去る

大臣 （ミコトの命令を怪訝そうに）・・・よいのですか、これで

ミコト 見たか？

大臣 は？

ミコト イヌヲがぶら下げていた

大臣 首・・・かざり・・・ですか？

ミコト 鉄だよ

大臣 え、鉄！？ ま、まさか、あれが！

ミコト はるか西の地に、鉄が大量に取れる場所があると聞いてはいたが、遂に見つけたのだ！
はははは・・・イヌヲを偵察にやった甲斐があった！！

大臣 では、鬼というのは・・・

ミコト 鬼などどうでもよい！

大臣 え

ミコト 鉄だ、鉄がほしい。

鉄があれば、わがヤマトのクニはもっともっと強くなる。
そう思わんか？

大臣 ……はい

ミコト (手をたたき) さあ、かくれんぼのはじまりだ！

大臣 かくれんぼ？

ミコト 鬼が捕まえるのではない。鬼を捕まえる、かくれんぼだ！
ひと……っ、ふた……っ、み……っ、もういいか……っ！
とな。
どうだ、面白いだろ！

大臣 さすが、ミコト様！

ミコト さあ、イヌヲの後を追え！ やつが鬼の隠れ場所へ案内してくれる。

大臣 はい！

ミコト よいか、わしが平和をもたらすのだ！
鬼に苦しむものどもに、この、わしが！！

暗転。

7. キビへの路

キビへ向け必死に走るイヌヲ。

イヌヲ　大変だ、大変だ、大変だああああ

山のフモトでは爺婆が山のほうを眺めて

爺　ようやくミコト様が鬼退治にきてくださった。

婆　これでわしらも安心して暮らせる。鬼は怖いけえのお

爺　へえ・・・婆さん、鬼見たことあるんか？

婆　爺さんこそ、鬼見たことあるんか？

爺　ほうか、そんなに恐ろしい姿をしとるんか。

婆　まあ！襲われそうになったんか、そりや大変じゃ

爺　ミコト様がわしらに平和をくださるそうじゃ。

ありがたや、ありがたや。

婆　さすがミコト様じゃ。きつと立派なお姿をしとるんじやろ。

ありがたや、ありがたや

再び山の中を必死に逃げるイヌヲ。

イヌヲ　早く・・・早くあいつらに伝えないと・・・

あれ？どっちだ？道が分からねえ。

突然イヌヲの背後から山の民が現れ、大きな布をイヌヲの頭からかぶせる。

イヌヲ　わ、な、なんだ！

おい、や、やめろ・・・

イヌヲ、無理やり連れ去られる。

8. 山の砦

イヌヲ　　ちよ、やめろ、やめろって！！

布を被されたイヌヲ、無理やり部屋につれこまれる。

イヌヲ　　（布を脱ぎ捨て）あれ、お前ら！　何で！　・・・ここは？

山の民 1　手荒な真似をしてすまなかった。

ミコト達に気づかれぬよう、こっそりここへ連れて来いとの、お嬢のご命令でな。

イヌヲ　　え

山の民 1　お嬢！　ご命令どおり、連れてまいりました。

奥から少女が現れる

イヌヲ　　おい、命令って・・・一体どういうことだ！

・・・お前は・・・お前は何者なんだ！！

少女　　（ゆっくりと）わたし・・・う、ら・・・

イヌヲ　　うらー！ー！ー？？

じゃあ、お前が鬼？？？

少女　　おに・・・？

イヌヲ　　そんな、（山の民に）おい、嘘だよな。

山の民 1　お嬢

少女、うなずく

山の民 1　イヌヲ。お主に・・・聞いてもらいたい話がある。

イヌヲ　　え

遠くから波の音が聞こえる。

波の音に導かれるように、少女はイヌヲの服を引き、一段高い場所へ上る。

波の音に合わせ、少女の体がゆっくり前後に揺れ始める。いつしかイヌヲもそれに合わせて。

波の音が徐々に激しさを増す。

山の民 1 無駄だ！ミコトは百も承知のはず。

承知の上で、我々をほろぼすつもりだ！

イヌヲ そんな・・・なんで・・・なんでだよ！！

山の民 1 ヤマトはそうやって国を広げてきた！

イヌヲ じゃ、じゃあ、早く逃げよう。ミコト様がもうそこまで・・・

少女 （イヌヲの言葉を制して）イヌヲ・・・逃げろ

イヌヲ え

山の民もうなずく

イヌヲ え・・・お前らは

山の民 1 わしらは戦います。

イヌヲ 戦うって・・・無理だ。勝てるわけねえ！

山の民 1 例え勝ち目がなくても、簡単にこの地を捨てるわけにはいかない！
お嬢も・・・それを望んでいる。

イヌヲ そんな・・・（少女にかけより）なあ、おいらと一緒に逃げよう。

少女、首を横に振る。

イヌヲ 何言ってたんだ、まだ子供じゃねえか。

少女、首を横に振る。

イヌヲ じゃあ、おいらも一緒に戦う。

少女、首を横に振る。

イヌヲ なんで！

部屋の外で激しい音

山の民 1 少し、外の様子を見えます。

・・・イヌヲ・・・お主は、よく似ておるのだ。
亡くなった王子、つまりお嬢の父親に。

イヌヲ　え・・・

山の民、部屋を出ていく。

イヌヲ　おいらが・・・お前の・・・父ちゃんと・・・(似ている)？

少女　(問かけには答えず)・・・この・・・みんな・・・助けてくれた
・・・私と、(イヌヲを見て) 父さんを。

イヌヲ　おまえ・・・

少女　わたし・・・もう、逃げない・・・だから・・・イヌヲ・・・逃げて

イヌヲ　なんで・・・

少女　イヌヲ、死んだら・・・誰・・・覚えてる？
このこと・・・みんなのこと・・・父さんのこと・・・
イヌヲ、死んだら・・・私、鬼・・・ここ、鬼の国になる・・・
・・・私、鬼じゃない・・・

イヌヲ　・・・だから、おいらに話したのか？　お前たちのこと・・・
おいらに・・・おいら一人に・・・託したってことか？
だけど・・・そんな・・・おいら・・・そんなこと・・・

少女　大丈夫・・・イヌヲ・・・言ってた・・・逃げるの・・・得意

少女、追いかけてっこをした時のようにイヌヲを叩こうとする。
イヌヲ、逃げず少女の拳を受け止める。

イヌヲ　・・・わかった。おいら・・・ずっと忘れない・・・
「このことも・・・お前のことも・・・(少女の手を取る)」

山の民が駆け込んでくる。

山の民1　申し上げます！ミコトの軍勢はおよそ一万。もうそこまで迫っています。
お嬢・・・どうされます。今ならまだ・・・

少女、イヌヲの手を振り払う

イヌヲ おい！

山の民 1 イヌヲ、裏の門を抜ければ、まっすぐふもとまで降りられる。
(布を渡し) これを被って、一気に駆け抜けるんだ。

イヌヲ ……

山の民 1 安心しろ！簡単には入れさせません。

少女 ……いこう

少女、山の民を引き連れて出て行こうとする

イヌヲ ま、待って！！

少女 (振り返る)

イヌヲ また……会える……よな？

少女、一瞬笑顔を見せて、颯爽と立ち去る

イヌヲ うわああああああああああああ

イヌヲ 布をかぶり駆け出す

9. 終章

戦の音がする中を、必死に駆け抜けるイヌヲ。その音はいつまでも止む気配がない。激しく転倒し足を痛める。それでもまた立ち上がり、片足を引きずりながら、再び駆け出す。

突然、音が止み、イヌヲ足を止める。
今までの喧騒が嘘のような、静寂。

イヌヲ　止んだ……。音が……。いくさが……。お・わ・つ・た。(崩れ落ちる)
うう……。ちくしょー、ちくしょー、ちくしょー、ちくしょー、ちくしょー、ちくしょー……

地面をたたいて、悔しがる

イヌヲ　おいら、なーんにもできなかった！
どうして？……。どうしてだ！！

みんなが、みんなが幸せにくらすことはできねえのか……
(下りてきたばかりの山に向かって) ちくしょー……！

静寂

イヌヲ　静かだ……。なにも、なかったみてえに……。
このまま、ここに住んでたあいつらのことも、
なーんにも、なかったことに、なっちまうのか……

イヌヲ、自分のつけている首飾りを気づき、手に取る。

イヌヲ　いや、そんなことはさせねえ。
おいら……。約束したんだ……

夜が明け、朝日がイヌヲを照らす

イヌヲ　おー……。終わっちゃいないぞー……。鬼が隠れるおかしなくれんぼは！
じーつと隠れてな、見つからないように。
そして、いつか、鬼が隠れなくてもよくなった時には、また、おいらの前に出たおいで。
その時まで、おいら、ずーつと、ずーつと、待ってるから。

イヌヲ、ゆつくりと老人に姿を変える。

老人　ひとーつ、ふたーつ、みいーつ
もういいかーいい

遠く呼びかけるように、繰り返す。

片足を不自由に引きずりながら、四方に向かって

老人 （繰り返し）もういいか――――いい

少女が登場。背後から老人に近づき、服の裾を引く。

老人、振り返り、少女の顔を見つめる。

じつと、見つめる。

終劇